Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-23

船と旗 : 象徴としての船 (2)

中本, 泰任

(Citation)
海事資料館年報,17:1-11

(Issue Date)
1989

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005759

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005759

KOBE UNIVERSITY

船　と　旗
—象徴としての船(2)—

青幡の木幡の上を通ふとは，目には見れども
直に逢はぬかも
—万葉集，巻二，一四八

中　本　泰　任

1．はじめに

翻ってみると他の乗り物とは異なり，船と旗の結び付きは非常に強いもののようにおもわれる。これは一見なんの変哲もなさそうであるが，少し考えてみれば不思議なことである。たとえば現代の商船の通常の運行時に用いられる旗にしても，国籍旗，行く先旗，社旗それにさまざまな種類の国際旗旒信号旗と数多く多種にわたっている。もちろんこうした類の旗は，海上，港湾で他者に自船の所属を明示し，意志を伝え，情報を交換するという航海上の実用的な目的をもったものであり，そのために旗が使用されるのは，海上という環境下での交信に適しているという理由があってのことだろう。色とりどりに彩色された旗は視認性に優れ，それを掲げる船に注目を集めよう。また一度掲げれば一定時間自動的に信号を発信しつづけてくれる利点もある。これは車の右－左折表示，停止表示とは異なり比較的長時間にわたって一定の航行状態をとる船にとっては好都合である。たとえば瀬戸内海などの多島海で島々をむすぶフェリーが航路を横切ろうとするような場合，常時横断旗をかかげておけばよい。あるいは軍事艦船が無線を封鎖して艦隊行動をとるような際にもこの通信手段は威力発揮するであろう。

しかしこのような直接航海そのものに利用するのとは少し意味合を異にする類の旗もある。たとえば軍用船にもちいられ，その軍所属をしめすとともに，一種士気発揚も目的としているとおもわれる軍隊－軍艦旗（たとえば英国のwhite ensign），指揮官の坐乗をあらわす指揮官旗ないしは将官旗，また決戦時に士気鼓舞を目的とし，最初日本海海戦に用いられたというZ旗などがそうである（写真１．参照）



写真１．左－梶の紋をつけた松浦党の軍船旗
右－八幡船の旗
（共に長崎県平戸市，松浦史料館で筆者撮影）

さらにまた直接実用性をもたず，いわば人間の生活習慣にその由来をもつような，いわば儀礼－祭礼的な意味合の旗が掲揚される場合もおおい。実用を目的として定められた旗旒信号旗にしても，「貴船の安航を祈る」といった意のたぶんに挨拶儀礼的なものもあり，外国の港に停泊中その国の国旗を掲げるという習慣もこの部類に属するだろう。また進水式の際，あるいはわが国の練習帆船にみられるように儀礼訪問時，パレードなどに参加する際などには，艦船は万国旗や信号旗をもちいて華やかにイルミネートされる。また官船の退役時には長い解役旒（paying off pennant）が掲げられる場合もあるし（写真２．），船舶旗を半旗にして弔意をあらわすこともある。

さて前回にひきつづきここでもわれわれは〈象徴としての船〉を問題にしていきたいのだ



写真２．長い解役旒を掲げて入港する英空母ハーミーズ（『世界の艦船，1984.no.335』より転載）

が，上の最後の例はいかに船という存在が，生誕や成人，結婚，死という人生の節目に執り行われる通過－加入儀礼を象りそれとパラレルであるかを物語っていよう。これは他の乗り物にはみられないことである。それが実用的なものであれ象徴的なものであれ船と旗がこのように結び付く歴史的経緯を私は詳らかにしないし，また実際にその種の書物を漁ってみても専門的に船と旗との関係の由来を論じたものは，私の知るかぎりほとんどみられない。しかし少し古い船の図版などみればおおかたの船になんらかの旗が掲げられていることは特に船に詳しい者でなくとも周知のことがらであり（たとえば図１.），このことはなにか古い記憶の底に沈んだ固定観念のような気さえする。われわれは少年



図１．様々な旗旒を掲げた中国船
（"Science & Civilisation in China" より転載）

時，木片を削って模型の船を作る際，必ずマストを立て旗で飾らなかったであろうか。日曜画家アンリ・ルソー（H.Resseau）が，誇らしげにまた夢見ごこちに描く自画像の背景には，エッフェル塔がそびえ，空には気球があがり，なにがし祝祭の気分に満ちているが，そこにはまたセーヌ川に浮かぶ満艦飾をほどこした帆船が描かれ，画面に幼年時代への郷愁のごときものを添えている（前回，航空機も比喩としてはフネでありまた現に〝ship〟と呼ばれていることを指摘しておいたが，「旗艦　flagship」という語も用いられ，航空会社の所有する飛行機のうち，最新，最大でその社の代表格的機体は〝flagship〟とよばれる）。もちろん高い帆柱やクレーン，アンテナマストをもった船は旗を掲げるには格好の構造物であろうし，また広大な海上を航行する船にとって高く掲げられた旗はその存在の目印でもあったろう。そうした伝統習慣が，たとえばディーゼル機関になってもかつて蒸気機関時代の高くおおきなファンネルを装備する例にもみられるように，残留してきたと言えなくもない。しかしそれだけでこの両者の強い結合を理解しうるであろうか。かりにその来源はそうした事情であったにせよ，ひとはそこに人間のいわば存在論的必然に従ったなんらかの新な意味をみいださざるをえない。その新たな意味をわれわれは〈象徴〉という言葉で呼びたいのであって，その見い出された新たな意味になんらかの必然性があればこそ人口に膾炙してやがて思想というひとつの現実となりうる。海や船，航海という語が比喩的に用いられるのはわが国に限った話ではない。ちなみに現代ドイツの哲学者ブルーメンベルク（H.Blumenberg）から引用してみよう――「人間の生を航海になぞらえる隠喩法のレパートリーは多彩をきわめる。海岸と島，港と外洋，暗礁と嵐，浅瀬と凪，帆と舵，舵手と投錨地，羅針盤と天測航法，燈台と水先案内人等々。外洋での危険の表象は，航海の終着点である港が約束する快適さと安らぎ，安全と心浮き立つ楽しさを思い浮かべるよすがとして利用されることがまれではない」。

さて前回われわれは，象徴としての船は，わ

れわれの常住する現世と超越（もちろん超越はさまざまに発想せられる。生誕も死も超越であれば，海，山，空の自然もそうであり，他者も共同体社会も歴史も，この私自身の存在さえ超越であろう）とをとりむすぶ運搬者ではないかと指摘しておいた。現代のいわゆる高度に発達した文明社会生活にあって超越が超越として——時にまばゆい栄光として，時に不可知の闇，禍つ日として——その姿を露わにすることがいかに希であれ，われわれは常に超越へと差し向けられ，そこに漂っているという人間の基本的構図に変わりはあるまい。ただ汚穢に蓋するごとく，外の闇を紛らわす船内の人工照明によって隠蔽されているにすぎない。パスカル（B. Pascal）に言葉を借りれば，われわれは既にそして常に船出しているのであり（"Vous êtes embarqués"），そして航海の意味とは，通常の住処であるはずのこの陸地＝此岸に安住しえないものであるからこそ航海である以上，航海とはブルーメンベルクの言葉を再度借用すればつねに此岸と彼岸との間の「境界侵犯」でしかありえない。われわれの自由にプランし創造した文明の船はそれが自由な創造であるがゆえに，パラドキシカルにも〈無からの創造 creatio ex nihilo〉でしかなく，それゆえ根拠の不確かな深淵に浮遊せざるをえない。「万物は水である」という古代ギリシャの自然哲学者タレスの言以来，人の生が航海に喩えられてきたとすれば，それはわれわれの存在がつねに自由と超越との狭間の，曖昧で両義的な（ambigu）境界領域にしかありえないことの謂いではないだろうか。

以上のように，船が超越へと差し向けられたわれわれの存在のメタファーであるとすれば，そこに高々と掲げられた旗にも当然これと密接に関連するメタファーを読むことは可能であろう。いなむしろメタファーをみなければかくも特異な船と旗との結合を理解できないのではないだろうか。以下われわれはこうした観点から〈船と旗〉について考えてみることにするが，ここにあとひとつだけ付言するとすれば，それはこのように日常生活の中でなかば無意識的に語られる暗喩がたんに暗喩に終わらないことをかいまみる時間－空間をわれわれは伝統的に整え設けてきたはずだという点である。それは日々の労働に追われる〈ケ〉の重たい持続のなかにぽっかりとあいた空白の時，しかもその空虚さのうちにこそ超越に包まれてあることの悦びが溢れだす〈ハレ〉の時，すなわち祝祭の時と場である。わが国には通例船祭り，港祭りなどと称して，一見海や，船にかかわるとおもわれる神事－祭礼が非常におおい。そこで執り行われる行事に共通にみられるのは，青い笹の葉や，松，杉の葉を頂につけた旗や幟（これには漁船の大漁旗が使われることもおおい）を押し立て，華やかに飾られた船が繰り出すことである。ここにおいて〈船と旗〉のメタファーは，隠喩であると同時に具象物としての姿を露わにする。こうした祭りの数はあまりにもおおいので，ここでは紙幅の関係上，『海の暮しと祭り』という写真集から一例だけを引いておこう。それは石川県珠洲市・御船神社で四月十七，十八日に行われる「伴旗祭」という船祭りである。船に立てられる大旗を作るのは子供達の仕事であり，旗船は笛，太鼓，鉦で囃しながら神輿とともに湾内を巡るという（写真３．）。転載のものは小さいがこの写真からは，春の潮風にはためき鳴る大旗の音や海のきらめき，明るい新緑の山，そしてそれらと無心に戯れ楽しむ人々の歓声が伝わってきそうである。ホイジンガ（J. Huizinga）のいうように人間の本質はまずなによりも〈遊ぶ〉ことにあるとすれば（homo ludens），そして遊ぶとはそもそも日々の生業から離れて超越と戯れること以外ではないとす

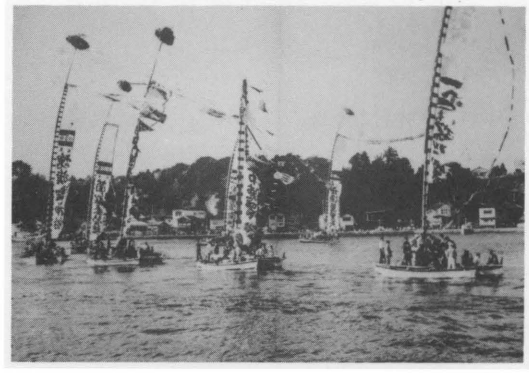

写真３．石川県珠洲市・御船神社の伴旗祭
（『海の暮らしと祭り』より転載）

れば，祝祭の最中においてこそ，日頃覆い隠されていた超越は遙かな高みから人々の真近にその輝きを増すだろう。

2．旗の意味

今回の話題はまず〈旗〉であるが，旗は一種の記号として当然象徴性をはらみ志向しているが，他のいかなる記号系にもまして象徴性に勝っている。このことは多言を要すまい。しかしその一例を中原中也の詩にとろう。

曇　天

ある朝　僕は　空の　中に，
黒い　旗が　はためくを　見た。
はたはた　それは　はためいて　ゐたが，
音は　きこえぬ　高きが　ゆゑに。

手繰(たぐ)り　下ろそうと　僕は　したが，
綱も　なければ　それも　叶(かな)わず，
旗は　はたはた　はためく　ばかり，
空の　奥処(おくか)に　舞い入る　如く。

かかる　朝を　少年の　日も，
屢々(しばしば)　見たりと　僕は　憶ふ。
かの時は　そを　野原の　上に，
今はた　都会の甍(いらか)の　上に。

かの時　この時　時は　隔つれ，
此処(ここ)と　彼処(かしこ)と　所は　異なれ，
はたはた　はたはた　み空に　ひとり，
いまも　渝(かは)らぬ　この　黒旗よ。

さてこの詩ほど旗の象徴性をまさに象徴しているものはあるまい。詩人の頭上遙かな高みから，詩人も暮らしている，また詩人といえども重い肉体をもつ以上暮らさざるをえない日常現世の時空を超えて，はたはたとかすかに翻るこの黒旗は，彼の現世の生も律する超越の秘やかな訪れであり，啓示（illumination,照らし）である。「曇天」という題に示されているごとく，なにがし不安な嵐の到来，終末の予感に満ちて……

この詩に端的にみられるように，空高く掲げられ仰がれる〈旗〉とは，いうまでもなく超越を差し招く〈招ぎ代〉であり，またそれが降臨，臨在する〈依り代〉でもある。

「一書に曰く，近江の天皇の聖體不豫みたまひ，御病急かりし時，大后の奉獻れる御歌一首

青幡(あおはた)の　木幡(こはた)の上を通ふとは　目には見れども　直(ただ)にあはぬかも」

天智天皇の后，倭姫大后のこの歌は，題詞どおりに受け取れば，天皇病時に詠まれたものと解されるが，「青幡の木幡の上」を「葬儀の青旗」，「殯宮の白旗」ととれば，臨終後の作ともみえ，諸説がおおい。しかし「青幡の木幡」とは歌の意からすれば，逝くものを招魂するための招ぎ代であり，目にみえぬ魂が通い寄るための依り代であることに間違いはあるまい。青々とした樹木に生命の象徴をみるのはわが国に限ったことではない。わが国の例では，正月の若木とり，松飾り，盆の盆花迎え，子供の生誕時の植樹などがその典型であろうが，欧州のクリスマスツリーやメイポールなどもそもそも冬至の時節に春の甦りを願ったり，回復した生命の季節を悦ぶものであったといわれるし，旧約聖書創世記，ヨハネ黙示録には「生命の樹」の語がみえ，これらはすべて宗教学でいう〈生命樹〉の範中に入るだろう。花祭りの天道花も棚旗の笹飾りも同類である。そうして青々とした高木の梢のさやぎ，ざわめきに魂のあるいは超越のおとずれを感得するのは自然であろう。「小竹(さき)の葉は　み山もさやにさやけども　吾は妹思ふ　別れ来ぬれば」という人麿の歌は，上掲「青幡の　木幡の上を通ふとは」の歌とともに，寂寥，悲嘆の気分を伝えつつ，調べもイメージも美しい。

さて折口信夫もこの青幡・木幡を次のように解して言う――「旗は，豊後國風土記などにも弊束の意に用ゐてゐる。青旗と言うのは，神を招く代に立てる植物の葉を竿頭に束ねた弊束様の物で，高く青々とした容子から，山に準へて，

あをはたのを，枕詞としたのであろう。決して青色の旗があったものではあるまい。葛城山・忍坂山などにかかるのも，皆，此理由からである。こばたと続くのは，山城国木幡山ともとれるし，木でこさえた旗の意にもとれる」。またさらに言う――「枕詞成立の時代から言えば，此詞などは，中期に入れて然るべきものである。奈良の寺々に樹て並べられた外国風の幢幡は，見も知らぬ飛鳥・藤原の宮人の口などから，生まれたものと思われる。白和栲・青和栲と対照せられるのから見ても，青幡の青和栲であった事は，断言してさしつかへなからう」。すなわちハタとは元来カミの招ぎ代，依り代として青木の葉枝で作られた弊であった。これはアイヌの木弊「イナウ」，また青森県岩木山神社・「お山参詣」に使われる檜の削りかけの長い御弊を想起させるが，それに布製の旗，幟がつけられ，さらに代用されるのは異国風習の伝来によるのであろうか。今日でも野辺送りに際して色とりどりの弔旗がもちいられる地方があるが，周知のようにこれは中国，朝鮮半島の風習にもみられるものである。このようにハタの意味，またわが国におけるその由来をみるならば，先に引いた「伴旗祭」の写真に見られるように，祭時にたてられる旗の竿頭に笹竹や青木の葉枝が必ずつけられるものも，さらに神事－祭式のつくりものに青葉がもちいられるのも（たとえば家を建てる際の地鎮祭，上棟式）こうした意味合であろう。これはいうならば〈神籬（ひもろぎ）〉であり，島根県美保関町，美保神社の有名な「青柴垣神事」で五色の旗とともに船にたてられる〈青柴垣〉とは，国壊り神話で事代主神が海中に作ってその中にたて隠る神籬そのものである。したがって，さらに，群をぬく杉の老大木に注連縄がかけられるように，高い常磐木がカミの依り代であるならば，樹木そのものが，神社の杜も山の緑も宗教神話学に言うところの〈生命樹〉であり，〈宇宙木〉でありハタそのものであろう。万葉の「あおはたの」が折口の言うように山にかかる枕詞となるのも由なしとしない。このいわば宇宙木としての樹木信仰に関しては，神木にする切り倒したモミの大柱を野畠を曳き，坂落しにする長野県諏訪大社の「御柱祭」が有名であるが，記紀神話でイザナギ，イザナミ二神の国生みのくだりにでてくる「天の御柱」という語を憶いおこしてもよいし，アマテラスとともに高天原を主宰する「高木神（別名，高御産巣日神）」というのも気にかかる名称である。この神は天孫降臨に際して，朝廷の際祀をつかさどった中臣，忌部両氏族の祖先神に神籬をもたせ祭祀をおこなうよう勅している――「吾は天津神籬と天津磐境とを起こし樹てて，吾孫の為に斎ひ奉らむ。汝，天の児屋命，太玉命，宜く天津神籬を持ちて，葦原の中つ国に降りて，また吾孫の為に斎い奉れ（日本書記）」。ところでこうした神社の原型ともいうべき〈神籬〉，あるいは樹木への降臨信仰という思想は，さらにその来源を遡れば，わが国にのみ固有のものとは言えまい。そもそも『記紀』の記述が，神籬（熊神籬）とは新羅から渡来した天之日矛（天日槍）が持ち来たったものだとしているし，金達寿氏は，この熊神籬に関して，神の依り代である樹木を朝鮮語で「カムナム（神の木）」といい，日本の「カムナビ（神奈備）」とういのもこれに由来すると論じている。神が天から山頂や樹木に垂直的に降臨するという神話形態は，朝鮮・満州の北方大陸系文化におおいという指摘があるが，『魏志韓伝』に「各邑おのおの一人を立て，天神を主祭し，これを天君と名づく。また諸国別邑あり。これを名づけて蘇塗となす。大木を立て，鈴鼓を懸けて鬼神に事ふ」という記載があり，韓国の民族学者，張籌根氏はこの〈蘇塗〉を〈ソッテ（鳥竿）－これについていは拙文『象徴としての船(1)』参照〉とみる立場からその起源をツングースのものとし，または韓国の左りの禁縄もとりあげて，日本の神社の鳥居との関連を論じている。また金両基氏は，韓国の村境に立てられる〈長柱（これはわが国の道祖神，塞の神に相当しよう）〉や，石積塚の上に柱や樹木をたてた〈城隍堂〉を世界樹信仰とみなし，その祖型を蘇塗や檀君神話の〈神檀樹〉に求めている。われわれがここでこれに注目したのは，後述するように，大木に鈴鼓を懸けて神事をおこなうという点であるが，もちろん高い樹木に何らかの超越の徴をみるというのはこれにとどまらず

さらに広い地域，民族にわたっている。中国の〈扶桑〉伝説もそうであろうし，わが国の神話のいわゆる〈海幸彦，山幸彦〉の話にしても，これはインドネシア，メラネシアの南方に，あるいは最近では中国江南地方に源流を発しているという説が一般的であろうが，山幸彦（火遠理命）が遙か訪ねる海底の異境，綿津見の神の宮門には「ゆつ香木」が立つとされる。これはいうまでもなく常世郷のシンボルであろう。この「ゆつ楓」の木はまた，ホノニニギ命が水穂の国に降るに先立ち派遣された天若日子の家の門にも立っている。この木に雉が泣女として遣わされるのだが，さらに天若日子の死後，喪屋での葬祭にはさまざまの鳥類が活躍する。この鳥なども前回話題にあげたように霊魂のシンボルであろうが，この若日子の話などは，どうも比較的南方の農耕祭儀に由来するような気がする。後で触れるが，中国南西部，貴州省，湖南省，広西壮族自治区あたりに住む苗族には，神木として〈楓香樹〉を祀る風習があり，また田植に際して田のなかに杉の若木に白い御幣状のものをつけて挿し，「祭田」の儀礼をおこなうという。さらに付言すれば田島守が常世の国に捜し求めた「非時香果」もそれが香り高い柑橘類を意味するとすれば，南国のイメージは強い。『紀』の記述はなぜか中国江南，呉・越の地にたいする憧景に溢れている。このようにわが国の神話から〈木〉ひとつを話題にとりあげてみても，その出自は多方面にわたることが示唆され，それを巡って史学，考古学，比較神話学，民族学上の諸説，議論が展開されるわけだが，それはわれわれのここでの関心事ではない。上に諸例をあげることでさしあたり，〈樹木〉すなわち超越の徴としての〈旗〉であることが確認されればよい。こんにち屋敷内の大木が愛でられるのも，また古色蒼然とした田舎家の大樹に郷愁が重ねられるのもこうした心象によるのであろうか——「あはざらむことをばしらではははきぎの　ふせやとききて尋ねきにけり」西行。

以上，幾分古い事例をもとにして〈ハタ〉の意味を考えてきたが，ハタがこのように超越の徴であるならば，日頃は隠れがちな，また忘れられがちな超越が公認されてその姿をあらわにする祭礼日にこそ，ハタも高々と自らを誇示するはずである。これは各種祭礼をみれば一目瞭然としており，ここでいちいち例をあげるまでもあるまい。先にあげた秋田県の「伴旗祭」，福島県・隠津島神社の「木幡山の幡祭り」などハタそのものが祭事の主役を演じる場合もあるが，一般に秋祭りの神社の参道の幟も，寺市を知らせる色とりどりの旗旒も，また東北地方におおくみられる「鹿島流し」の舟の満船飾にしても同様であるし，漁船の大漁旗にしてもそうであろう。

3．船と旗

さてこれまで見てきたように，〈ハタ〉とは超越の招ぎ代，依り代としての樹と同義であり，一方象徴としての〈フネ〉が前回述べたごとく超越へと差しむけられたわれわれの，また超越から寄り来るものの乗りものであるとすれば，この両者の結び付きは，たんなる実用性を越えてさらに強固なものであるはずである。また古代，舟を木から作る際，ことに『記紀』の「枯野の舟」，『播磨風土記』逸文「速鳥」舟の巨木伝説にみられるように比較的大きな舟を建造する際には，特別の大樹が必要であったとすれば（これは一本木で刳舟を作る場合，ことにそうであろう），そして船材にする大木が楠，櫟などのいわゆる神木であるなら，フネすなわち依り代としての樹でありハタであるという等式さえ成り立つようにおもわれる。以下この点をいくつか例を引きつつ確認しておきたい。

先に船と旗の関係を専門的に論じたものはほとんど見あたらないと言ったが，私の目にとまった例外は，金澤兼光の『和漢舩用集（寶歴十一年，1761年）』である。広汎な古文献を漁り引用し，図版も収めた本書には特に「舟飾之事」という一節が設けられているので，参考までにその一部を引用しておこう——

「本朝景行天皇筑紫の御幸，又仲哀天皇神功皇后御幸の時五百枝の賢木を舳艫に立，三種の神寶をかけ素幡を立とあり。又，舒明天皇四年唐國使人高表人等到于難波津則遣大伴連馬養迎於江口。船三十二艘及鼓吹旗幟皆具整飭。と見へたり。西都賦曰，浮鷁首。翳雲芝垂翟葆建羽旗。注に曰，船頭象鷁鳥厭水神。故天子乗之。畫芝草及雲氣以為船覆飾也。又曰，登龍舟張鳳蓋建華旗袘繡帷鏡清流。注に云，龍舟は龍を舟にゑかく。鳳蓋は蓋の名，華旗也。繡帷は繡帷也。又，子虚賦曰，浮文于鷁旌枻張翠帷建羽蓋，といへり。華旗は彩旗なり。羽蓋は鳥の羽を折て為旌といへり。萬葉に，ともにもへにもふなよそひまかちししぬきはたあらし，とよめり。季吟曰，舟に立てし旌に吹嵐なり。舳艫に旌なとかさりし心なりと注せり。鎗，薙刀，弓，鐵炮臺，傘立，笠吹貫，旌幟なと飾は，官舟常のことなり。明律考，號帶一條龍順風旗（大はたにて風を見るはたを云うなり。）馬祖旗（舟玉のはたなり。）三色旗等あり。本邦，市舶に至るまで相印の紋を付，丸号を染込て幟を立る，是禮旗なり」

これを見ると，かって和漢の船でハタがいかに多用されていたかが想像されよう。この文中で興味をひくのは，鳥の羽でつくった旗飾りとか，〈馬祖〉の旗（この航海安全を願う娘媽信仰は現在でも，福建省，香港，マカオ，台湾あたりで盛んなようである）とか，儀礼旗など幾つかあるが，なかでも注目したいのは天皇の御幸時や，唐からの使者高表仁の来訪時に，船を賢木や旗幟で飾って出迎えるという点である。『紀』によれば景行，仲哀両天皇の筑紫行きは帰順しない「土蜘蛛」，「熊襲」討伐を目的としたものである。その際，「神夏磯媛」，「熊鰐」，「五十迹手」とかのいわばその土地の首長が賢木，素幟を立てた舟で出迎えるというのは，夏磯媛，五十迹手の言うように強大な政治権力に恭順の意を表するためであって，そこで用いられる〈ハタブネ〉はいわば超越者の来迎に添う意に用いられており，舟に立てられた弊帛状のものもけっして航海安全祈願とか舟霊信仰の類のものではあるまい。この弊帛状のものとは景行紀によれば，「天皇の使者至ると聞て，則磯津山の賢木を抜き，上枝には八握剣を掛，中枝には八咫鏡を掛，下枝には八尺瓊を掛，亦素幟を船の舳に樹……」とあり，この記述は仲哀紀にしてもほぼ同様である（『和漢舩用集』からこの場面の挿絵を転載しておく。図２．）これは『古事記』・〈天の岩屋戸神話〉において岩屋に隠ったマアテラスを招き出すために用いられた祭具すなわち「天の香山の五百津真賢木を根こじにこじて，上枝に八尺の勾璁の五百津の御すまるの玉を取り著け，中枝に八尺鏡を取りかけ，下枝に白和弊・青和弊を取り垂でて……」と形容されるものと同じものであろう。そうだとすれば，上に記した神夏磯媛，熊鰐，五十迹手のハタブネとは超越者＝天皇を迎えるための招ぎ代と解すべきとおもわれる。『舒明紀』に見える唐の使者高表仁来訪時のハタブネも，唐の〈天子〉を表敬するための儀礼であることを



図２．神夏磯媛の船の想像図
（『和漢舩用集』より転載）

考えあわせれば，この解釈は妥当であろう。『欽明紀』にも船飾りを施した船で高麗の使者出迎えたとある。後に一般の船にも榊や弊帛が立てられるようになり，その意味合も航行安全祈願といった幾分現世利益的なものになるとしても，その原義は本来，フネとハタがともに超越の徴であったというところに求めるべきではなかろうか。おなじく『仲哀紀』で神功皇后に懸った神が新羅討伐を勧める託を垂れる条りがあるが，そこで神は，船と水田を弊として献上するよう命じているのである。

ところで〈鏡や玉をさげた賢木〉という『記紀』にみえるこの祭具は，「木に鼓や鈴を懸けて鬼神をおこなう」という既述の『魏志韓伝』を想起させる。「鬼神をおこなう」というのが一種シャーマニズム的なものであるとすれば，〈天の岩屋戸神話〉でも巫女アメノウズメがこの祭具を前に神懸りの舞を舞うのである。わが国神話と韓国・朝鮮のシャーマニズムとの関係は往々に指摘されるところであるが，景行天皇を賢木の舟で出迎えた一国の首長「神夏磯媛」というのもその名からして巫女的存在ではなかったかと思われる。またこれは恣意的想像の域をでないのであるが，わが国初期の舌のついた小形銅鐸，また朝鮮式銅鐸はあるいはこのように木に懸けられて祭具として用いられたのではなかろうか。転載した鳥取県稲吉遺跡出土の土器の線刻画（図３．）には，鳥装した人物の漕ぐ舟，高床式建物，鳥，銅鐸状のものをさげた樹木がみえ，古祭儀の様が窺われて興味深い。福井県春江町出土の井向銅鐸には，三艘の競船とともに朝鮮半島の鳥竿らしきものも描かれており，國分直一氏はこれらを雲南石寨山出土銅鼓，ドンソン銅鼓上の鳥船画（図４．）および朝鮮半島の蘇塗祭式と結び付けて，「稲作の源流地方であった江南系のロング・ボートが韓南に登場，韓南における信仰習俗と複合したうえで，日本海深く東漸したものであろう」とし，江南と韓南を媒介したのは越系の水人ではないかと推定している（付言すれば，韓国出土の舟形土器には，鳥の面をつけた舟頭を乗せたものがある）。

最後にフネがハタすなわちカミの依り代たる樹から造られていたとすれば，この関連から舟そのものも聖化されるとおもわれるが，以下こ

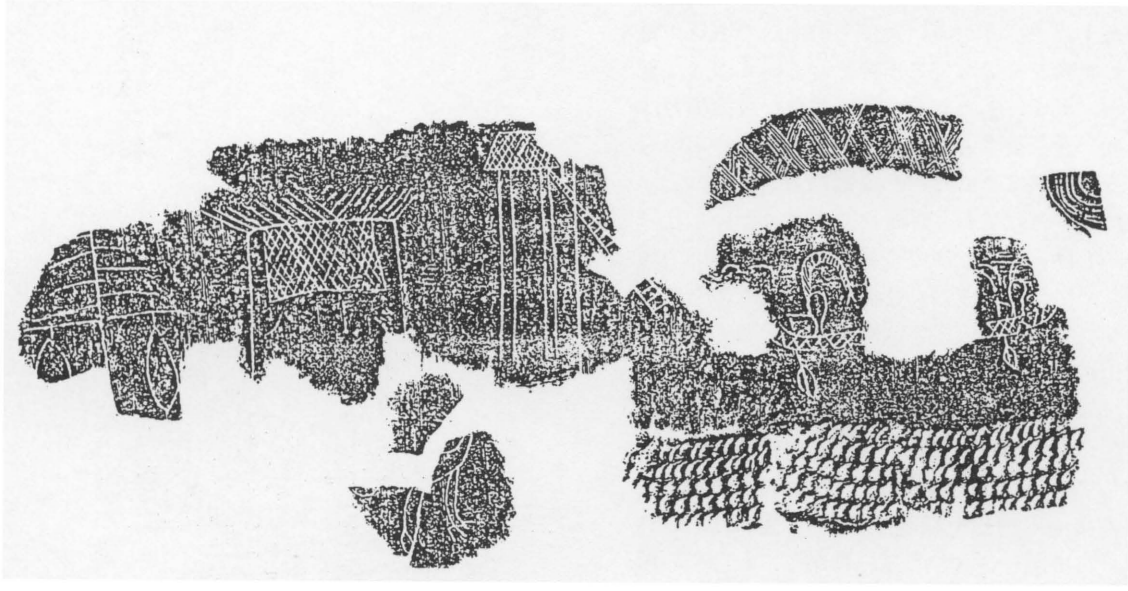

図３．鳥取県稲吉遺跡出土の土器の線刻画
（『日本の古代』より転載）

の点を簡単に見ておこう。

これは先述の「枯野の船」にみられる〈神聖な巨木伝説〉の類に属するとおもわれ，おおくの類例があるが，ここでは神戸市灘区岩屋・敏馬神社の由来譚とされる『摂津國風土記』逸文から引いておこう――「美奴賣の松原，今美奴賣と稱ふは，神の名なり。其の神，本能勢ノ郡美奴賣の山に居ます。昔，息長足比賣ノ天皇，筑紫ノ國に幸せる時，諸々の神祇を川邊ノ郡の内神前の松原に集へて，福を求ひ祈みまつりき。時に，此の神も亦同じく來集ひて吾も亦護佑まつらむと曰て，仍て諭したまひけらく，吾が住む山に須義の木有り。各宜しき材を採りて，吾が為に船を造りて，則て此の船に乗りて行幸まさば，幸福ましまさむと，まをしき。天皇，乃ち神の教のまにまに，命のらして，船を作らしむ。此の神の船をもて遂に新羅を征けたまひて還りいでませる時に，此の神を，斯の浦に祠祭りて，船を留めて神に獻り，亦此の地を名づけて美奴賣となも曰ふ」――これはおおくの神功皇后伝説のうちの一つでもあるが，ここで留意しておきたいのは，神功の新羅への海行きを加護したのは，海神ではなく美奴賣という〈山〉の神であり，そこに生える杉木で造った「神の船」であったという点である（ここにいう「能勢ノ郡」とは現在の能勢町をふくむ猪名川上流付近であろうが，ここは古くから山林資源にめぐまれ，また近くの武庫川とならんで水運の利にすぐれ，『応神紀』にいう造船に携わった新羅系渡来人〈猪名部〉の本貫地であったようである。現に猪名川沿いの池田市内からは古代の船木材が発見されている。また『旧事本紀』には物部の祖ニギハヤヒが乗って天降った「天磐船」の船子に「為奈部等祖，天津赤星」の名がみえ，これは伊勢の猪名部（三重県員弁郡には式内社，猪名部神社がある）とともに古代の海事・造船を考える上で興味ある点であるが，ここでは触れ得ない）。

もう一例だけ上に挙げた中国江南のロングボートの現代版というべきもの，すなわち中国南西部に住む苗族が田植後，端午節におこなう有名な〈龍船祭〉から引いておこう。これは沖縄県の「爬竜船競漕」，長崎県の「ペーロン競争」と非常に類似しているが，注意したいのは，

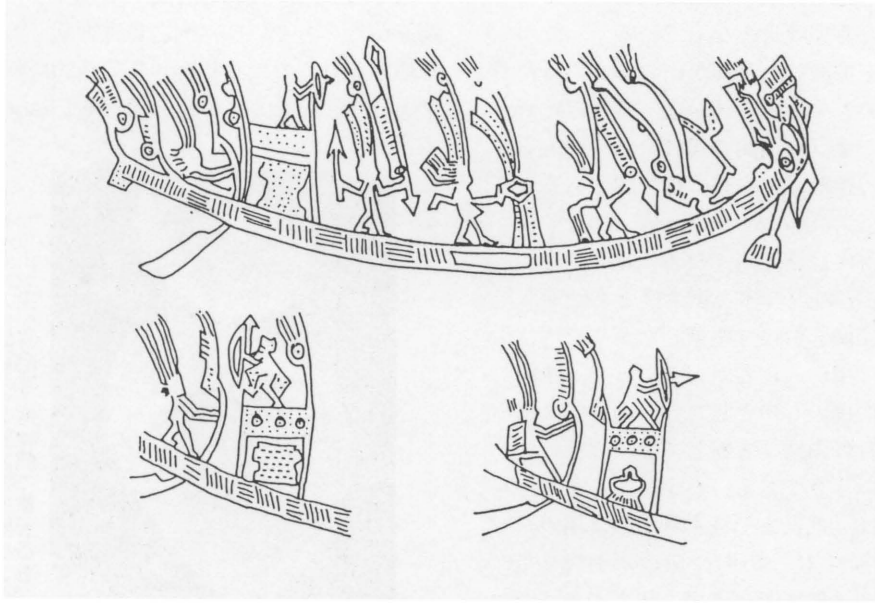

図４．ドンソン銅鼓に描かれた鳥船図紋
（"Science & Civilisation in China" より転載）

苗族はその遠い出自がどうであったにせよ現在は揚子江上流の山間で主に稲作・畑作を営む農耕民であるという点で，この祭りも川でおこなわれる。以下現地に調査した萩原秀三郎氏によって簡単に見てみよう。氏はこの龍船祭の意味合をさまざまに論じている，たとえば龍船の材木にはカササギが巣をかけたものが吉祥として選ばれたり，船首にはニワトリやカモなどが生きたまま何羽もかけられ，船尾には鳳凰の尾とよぶ茅がさされるなどの点からして，これをドンソンや雲南銅鼓のいわゆる〈鳥船図紋〉との関連を見（図４．参照），また端午節が苗族にとっては死霊供養ないしは祖霊節ではないかとの観点から，競舟は本来霊魂舟ではなかったかとしている。これは前回のわれわれの関心事でもあったのだが，今回のテーマに関係する点をこの龍船祭から拾ってみる。先にも触れておいたが，苗族には山に鎮まる祖霊が宿るものとして樹木信仰があるが（この神木で木鼓を作り打ち鳴らす「鼓社祭」という祭りもおこなわれる），龍船祭の場合も儀礼をおこなって山から一本の大樹を切り降ろし，また龍船を水に降ろす前に鬼師が川辺で山の神または山からの祖霊を祀る儀式をおこなうという。これをみると，ここにおいても超越の依り代たる樹がそのまま超越への渡したる霊魂舟となっているし，先の神功の海行きを加護した舟神が山の神であったように，龍船にも半ば山の神が宿っていると考えられる。このような山間の民に舟祭りがあることから苗族の祖源地を海辺に帰す説もあるようだが（たとえばエーバーハルト W. Eberhard は，龍船祭を海洋民族であった古代越人のものとみている），その説自体の正否はともかく私が上のような諸例を引いて提議したかったのは，フネが祭礼具に用いられるからといって，単純にそれを海辺の民のものとしたり，即物的に海上安全，大漁祈願の祭りと断じてはいけないのではないかという点である。わが国でも東北，日本海沿岸では，近世まで丸木舟が漁に用いられていたが（写真４．参照），山の木を伐り舟を造るのは山間の狩猟者＝山民の仕事であった。したがって奄美など南島で，刳舟の進水の際おこなわれる儀礼も山の神に関するものだという。



写真４．近世まで漁に用いられていた若狭湾の丸木舟（京都府立丹後郷土資料館で筆者撮影）

アリストテレスの言うように〈比喩〉とは語の本来の意の転義だとすれば，転化した新たな意味は，その意味結合によってまた新な語の体系をつくるであろう。龍船の「龍」または「蛇」という記号はわが国でもそうであるが，「水」（したがってまた「雨」「雲」，「河」，「海」等）にむすびつく。苗族のこの祭りもそれが田植直後におこなわれることから，水神の祭りあるいは農耕予祝儀礼とも考えられるのである。三重県磯部町，伊雑宮の「お田植祭」で田に立てられる青竹のサシバ（これは既述の招ぎ代としてのハタである）に舟の絵が描かれるが（写真５．），この舟も農耕予祝として水との関連から，あるいは〈天之鳥舟神話〉のごとく降臨するカミの乗り物として象徴的に解すべきであろう。そしてエリアーデ（M. Eliade）の言

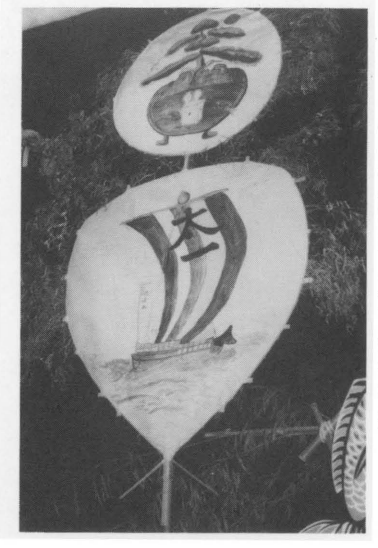

写真５．「お田植祭（三重県磯部町）」のサシバ（国立民俗学博物館で筆者撮影）

うように転義された象徴にこそ人間の存在論的構造が見えるものだとすれば，われわれは日頃それと意識せず，象徴方式で思考している場合が多々あるはずである。これまで述べてきたようにフネもハタもその例外ではあるまい。周知のようにわが国でも山間の神社で舟祭りと称するものがあったり，そうでなくとも舟型の山車が曳かれたりする例はおおい。長野県・穂高神社の有名な「御船祭り」などは安曇系海人の名残りだといはれているが，その「穂高」という地名からして稲作農耕儀礼との関連が想像されなくもない。同じ長野県・諏訪大社，下社で春秋二回おこなわれる遷座祭には，おおきな紫舟が曳かれることから「御舟祭り」ともいわれており，これは春に里に降った農耕神を秋に山へ送り返す祭礼だという。また海から遠く離れた山辺の神社などに和船の模型が奉納されてあったりするのは，いかに解すべきであろうか。祭礼で神輿の出来を「渡御」とか「お渡り」といったり，またわざわざ水中を担いで廻るのは何故であろうか。千葉徳爾氏は民族学の立場から，山民による造船事業の例，また漁民の信仰対象であるエビス神が奥深い山頂に祀られていたり，東北の修験道の山岳信仰の対象である出羽三山の神が海・水と結びついたり，さらに海民と山民の生活慣習タブーが類似しているといった諸例をとりあげて，「日本の山民と海民とをその居住地や生業の相違によって，全く異なった生活様式をもつものとみなす，いわゆる地理的環境論の見方」は当をえておらず，両者は本来同一の民族文化に根ざすものであったと考えているが，われわれは，文化記号のシンボル性，その普遍性という観点からこの問題をみてきた。象徴としての記号は，その原義たる海，山といった地理的，即物的環境を越えて，はるかに昇華されるだろう。

三度ブルーメンベルクの語を借りれば，高々と旗を掲げた船の象徴としての〈航海〉とは聖と俗とのあいだの〈境界侵犯〉なのである。

引用，参考文献

『古事記』，『日本書記』，『摂津國風土記』，『先代旧事本記』，『万葉集』，『山家集』，『中原中也詩集』，金澤兼光『和漢舩用集（復刻日本科学古典全書7，朝日新聞社）』，折口信夫「萬葉集辞典（『折口信夫全集第六巻，中央公論社』）」，「弊束から旗さし物へ（『同第二巻』）」，張籌根，松本誠一訳『韓国の郷土信仰（第一書房）』，金達寿『古代朝鮮と日本文化（講談社）』，杉浦昭典『海の信号旗（舵社）』，『世界の艦船、no.335（海人社）』，『探訪神神のふる里，八，十（小学館）』，萩原秀三郎『稲を伝えた民族（雄山閣）』，ブルーメンベルク・H.池田信雄他訳『難破船（哲学書房）』，ホイジンガ・J.高橋英夫訳，『ホモ・ルーデンス（中央公論社）』，Pascal.B. *Oeuvres complètes* (Seuil)，諸田森二『海の暮らしと祭り（国書刊行会）』，吉田敦彦『日本神話の源流（講談社）』，上田正昭『日本神話（岩波書店）』，Needham.J. *Science and Civilisation in China*, volume IV , part III (Cambridge U.P.)，エーバーハルト・W.（白鳥芳郎訳）『古代中国の地方文化（六興出版）』，邦光史郎『海の日本史（講談社）』，大林太良編『日本の古代3，13（中央公論社）』，谷川健一編『日本の神々6．（白水社）』，『尼崎市史』，田畑久夫・金丸良子『中国雲貴高原の少数民族（白帝社）』，國分直一「生活と信仰・習俗（江上波夫編『日本民俗と日本文化』－山川出版社）」，千葉徳爾「山民・漁民の社会と文化（『日本民族文化大系5．山民と海人』－小学館）」，金両基『物語韓国史（中央公論社）』，『日本宗教事典（弘文堂）』，山本健吉『万葉秀歌鑑賞（講談社）』，その他。